蓼草年録

堤蟻叢書

三十六

836
209
3

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3

ガラス使用

堤蟻叢書　三十七

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3

ガラス使用

高野藏書

大 527 購

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3

ガラス使用

[illegible]

面白ところ世話ニ[illegible]

一 殿中[illegible]

正月八日　御中間

京　[illegible]使

右於御家[illegible]仕付[illegible]

同九日

[illegible]寺[illegible]　堀田備中守

[illegible]　川添[illegible]

[illegible]　[illegible]

右[illegible]寺[illegible]

同十日

[illegible]　京　[illegible]寺

[illegible]　[illegible]

[illegible]　堀田備中守

二月十九日

[illegible]自[illegible]

[illegible]

[illegible]

右　御用之

一 今已上刻　御公方様　出御之[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

金七枚
時服五宛

金十枚
時服二

御金十両

金二枚
時服二

〃

金二枚
時服二

〃

太刀一腰　入御

一長崎ヨリ

已十二月廿七日備中守殿（御直）西渡ニ奉行大目付ヨリ南蛮長崎ヨリ西箱館ヲ行
手目付ヨリ西国定吟味役
西墨利加使節ハ衆議之上追ヽ厚極之親密寄ハ分早春條約為取替可相成就
ハ速ヽ御制度御変革可相成候ヒ少ヲ之間敷ハ西国ハ親密之所
羅府安之儀ハ分今分見届ヲ之ハ難相成度之所変革之ヲ古ハ見
合ヒ之ヲ後ヲ実ヽ御国勢之盛衰此一挙ヽ定ヲハ故後ヽ一身ヽ引
請赤心ヲ宗十分ヽ力ヲ尽シ以日ヲ之ヲ虚日ヲ中ヲ出上之ヲ制度ヲ
西不星振ハ速ヽ只也相ヽ之ヽ抜一ヲ之ヲ後浮説ヲ
致ヽ（度ヽ）
ヲ一ヲ般ヲ　御使上京之節御進献物等別紙書付之通ヲ

御風御香炉并御伽羅ゝ御臺支度一つ
寸法之儀ハ十条芝金羽二重大紋綸子巻物銀子ゝ御臺ゝ其他之儀
ゝ仮御納ゝ頭ゝ中度ハ回京黄金御香鑪御伽羅御用錦ゝ迄ゝ宿
ゝ先ゝ事ゝ到着次第御自分御修完一式ゝ差送ル以上

十月十日

本多美濃守

別紙

賞

芝愛備中守ゝ御使上京ゝ節御進献物

禁裏ゝ

公方様ゝ

色紙御香炉

御伽羅　一木

黄金　五十枚

准后ゝ

羽二重二十疋

禁裏ゝ

御臺様ゝ

大紋綸子三十反

准后ゝ

御臺様ゝ

色綸子十反

公方様ゝ

白銀百枚

巻物十　九條関白殿

同新　　齋宮司大國殿

白銀拾枚　　西傳寺

紫檀五

白銀三十枚　　勾當内侍

以上

別代　　賞

色絲縅鎧　　佛手鏡

右ハ箱寸法

四人ニテ　長　七尺二寸

横　八寸

佛伽羅一束

右佛名寸法

四人ニテ　長　七尺八寸

横　七寸五ト

右何モ箱寸法ハ分ラヌ心得ヲ以　佛居臺先格之通出来之事

今度　御使ヲ　仰付ラレ其比勤方手ガヲ伐共先達ヲ中務之儀ヲ引

後上京之報答ヲ詰事相心得一ノ申ハ有　御所向ヲ御部合ヲ可有之ハ

尋ネ　佐渡之日向ヲ尋ネ事ヲ分ヲ其所了達ハ以上

二月廿日

本多美濃守殿

此度ハ　佛後上京之節ハ美濃守殿ヲ川路左ヲ衛門ヲ日付

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

先例に倣ひ奉行並頭取千郎兵衛両人格式御右筆並の扱ひ
並頭取格平作儀御格式並目付壱人出張壱人出張
目付二人相応一回出張いたし候様千代蔵宿ホテル俄写真屋
可被申渡候以上

二月十五日

村田備中守

一 備中守殿書状写

○「有改」

一 戊年二月四日付勝兵部大輔へ相達の書付

亜墨利加使節申立の趣相違の儀尾州殿の為
に次第に方々無之由時日を国に事故申出候に付
仮に方々の向尾州殿に成に不至に拠り始一統に事情不
分明に付上申思
召しにて早々御出可被成候

一 戊年二月筑前守殿より御内書

御感状について公儀不日御附属の義西洋形に成候
不接続に西洋形に成後南蛮に成候に大手に
可被成に石近将監殿仕候以上

二月十五日

内藤紀伊守殿

内藤紀伊守殿

小笠原長行殿

勝野兵馬

小笠原長行殿

内藤紀伊守殿

勝野兵馬

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

戊午正月十五日附室田氏 雨森ヵ清吉ノ写写歟

一 去十二月廿九日亜人一条ニ付御旗本大名並溜詰中上衣十二時退散大広間柳間帝鑑間詰

之面表 出席前ニ閣老衆人様并若年寄田安一ッ橋両殿仙台両殿ニ而も

閣老衆中より近七ッ時ニ退出 十二月十四日 林大学頭并筒井肥前守之一件ニ付入来ん

十日佐倉上京並川路左衛門尉同月付上京 右者朱印之趣 天下ハ家之所世と不承人意豈

有之哉ハ一己無之様先ニテ如斯ニ候

亜人より当月末ニ一度下田へ引返ス夫より江戸人数ヲ以て風聞ニ候 何卒上ニ耳目し

寛大為之人と不出ハ益天意と之御事ニ 筒井肥前守ハ 皇国魂し強く存様ひく候

御上ニ而何卒上京し自ら子孫之根本を 安政紙亜人之儀ハ御国家も変じて

随ひ候様 実ニ当節ハ大事中之大事ニ有之候へとも一向ニ閣老衆中以上ニ而も是を

四ッ之如何様ニ而も事立て言語ニ絶し候事色々ニ候

水戸出生浪人の由こと

水戸殿の差出こと成

獄を送る時

かくとも天神地祇のみ社底のかくれ

右

江戸出る時

みちのくにかすみとりの国の者のきこえやすらんこと

獄を送らる時

武蔵のくにまつ山の侍にあれとりの道をすぎて道

右二首

水戸人使通何共殺害致度ことりすたり国祭ニ付寺人野

水戸度元光
武田信玄

信田 仁科

城山芳こ

蓮の葉

水戸度元光
武田信玄

仁科

水戸人出城方町奉行ハ多人寄ニ出度ニ而水戸人出城
ニ吟味度つもり四事のこと付場の傍中度何ニ而水戸人ハ
ものの太ハ水陸ニ而ハ番人ハ山芝神明伊勢通陸奥京都江拝礼
相望ニ付ハ多人ハ他行近所ニ出ハ太ハ人水戸人ハ出
出ハ其外ハ多頃ニ而ハ通ハ番人ハ国元ハ人ハ
一 ニ月ニ而ハ水戸人ハ書ニ付ハ人寺ハ浪人ハ
宅ハ乱ハ陸ハ水ハ
ハ通ハ一ハ番ハ
と、ハ矢ハ実ハ行ハ後ハ刑ハ
太閤ハ
桜ハ
此度ハ公家ハ
山 紀伊の山の神のたり

大学ハ中ヨリ分ル内ニテ学ブ者ハ学問道徳
ヲ以テ主トス　其上ノ議論ハ
場所ノ分ヲ押人ラナイ　仮令ヒ天下ニ花ヲ
アメリカ人ヲ求ル世人ラナイ

戊午正月十五日付江戸より来書抄

昨冬以来アメリカ之説も事切に成て内先神奈川辺に通高町杉立の家に而決定
仕候風聞実説に成て諸人驚恐京都に而も昨冬十四日水戸大学殿伊達津田出三位殿上
京の変態実之者出来の儀如更に奏聞有之候ハ此度別帝に通
仕候人当月廿五日上京中堀田侯ハ十方面程に而内に而用意仕登り之由イキ
リス下田に三艘渡来致し居り其外八丈に数十艘出掛り風聞に而実に
異変以来不穏風説取々故伝分中方程に而面々之当惑仕て水府面々に而老中
方へ内々に而通り に成て更に逢ふ所に成る加州侯ハ若年分
江戸表に居る紀尾両老元七程に而至和に出立仕ル大混雑に成り
近て実説新聞江戸上る　別帝左に記ス

一説別段遠慮ハ無之
緋毛氈
[illegible]

三月十五日

京都江ハ暇ハ年自前織江下ス

金二十枚　時服十

一金弐千両　御年伺より江下ス

一金五千両

右之此度京都江使ヲ仕付急速出立ニ付彼是格別物入多ク段江聞召
ル付別段之思召を以ハ内々拝借江仕付ハ返納ス候ヘ共未年ハ辰年迄十年
賦返納

黄金七枚　時服三羽織

黄金五枚　時服二羽織

堀田備中守

川路左衛門尉
豊奉行

岩瀬肥後守
目付

黄金五枚　時服二羽織

黄金三枚　時服二

黄金三枚　時服二

黄金二枚　時服二

黄金二枚　時服二

右京都江ハ毎年拝領物

又

目安イキリス之
ヲ又就

亜墨利加イキリス之強情大廷之形勢空を追ハ及ヒ難ク嘆息之次第終ニ諸処交
易之地ハ取開之趣ハ内々之交流ハ水府老公合点之情不至ハ国主方ハ無法ハ
之表向ハ已有之内仙台ハ未ハ義後ハ不至ハ出州ハ沢ハ不義知ハ仕切ハ近頃日下部内
咄ハ弟ハ四人之林ハ印を　京都江ハ参て江戸備ハ倘事大小流ハ不拘事

奥山右京亮
京　弥十郎

西丸格奥右京亮
立田　帯刀

目安役
高橋平作

目付
日下部官之丞

徒士目付格
平山謙次郎

不得止先彼の願に任せられ諸処に交易所を開き兵庫に於て兵庫に於ては関西諸侯に達
せし三條大納言殿に達何も類中之最上に不抜成事を先達て　勅命之趣徒
換し候今以雨至早晩調達之期て有之哉下田貸地之事も後而之伺ひ甚
輕蔑之次第外夷出国條余も本邦興廢之場将軍如何相心得哉と嚴敷問詰
ヲ以て沢雅之既に昔し中山殿の如く三條殿江戸に下向して兵庫表暫に狀況
ヤ立早速を以旧職其方早速何有之堀田侯に上京し速に交易の許
容を願敷と申るに熟考今年中に動揺之姿に及ぶと第一表中水府
老公君臣を全体彼に死し遂に志に任せられ候ハ怯弱に次第歳地に成
院取建如支丹宗の教を行ひ人心代長秀吉為公ましく禁制孫三代将軍に至
断絶と罰せられ候を当将軍より又々引起しと申ハ義理合ざる所
ア乃殺ちこれ
堀田備中守迎の字

以四枚致啓上候今日付中村合て堀田侯并御家老迄通牒ヲ
以写御迎下早速に此度堀田侯御家内に返却て下れ以上

月　日

堀田信濃守様　　浅野長平
戸以上紙　　寺田嘉彦
松平山城守様　　黒川一郎
かゝ後城中守様　　堀田摂津
松平伊賀守様　　堀田備中守
右之通五通ヲ写ス

方へも蔵米を送り常平一万石通達下され候ゆえ米穀値段各々
田村伊豫守方へ下り写し以上

二月廿五日

丙午七月廿五日

右多賀豊後守殿

覚

世話利加使節一應渡到西海の表へ申越いたし候ゆえ乗船の為
仰付候ゆえ出帆致し候ゆえ御用向一応申達候

二月廿五日

大目付

右使節の儀中ゆえ殿様御節句に付御祝儀に付遠慮
申上候

玉川一学

江戸府来書抜

世話利加使節ヒュウ先中ゆえ江戸へ入り候ゆえ
四月五日後ゆえ死亡の病者四人有之候ゆえ
命じ申候ゆえ出帆致し候ゆえ使節乗船致し候ゆえ
出帆節ゆえ御祝儀御遠慮の儀
田舎へ出張致し候ゆえ御祝儀遠慮
伝田侯川路聖謨殿

火災之記

安政五年戊午二月十日夜五ツ時過日本橋ぎんじゅう辺より出火して折しも乗
風烈々敷小田原丁一二丁目の間戸物町元側伊勢町両岸半分室町一二丁目東
側少し残る布船町納屋橋一四日本橋江戸橋残る通り二丁目本戸際少し残る

万町書物町吉田町左内町小松町平松町川側石町南田町ふ筋新堀町
大し筋る呉正町大し筋り内賊格焼屋敷牧野板筋る切ケ町裏表茅場町
代官屋敷ふ筋霊岸島町川口町長崎町白銀町三丁東隣町ニ丁ふ筋越前堀
筋る新川南側大し焼る又一口ハ同海町大神宮ふ修化元八町筋一田中
橋筋る南八町筋二丁目大し三丁目場筋掃部板筋板筋る阿波板ふ筋場田板
半焼後配図稲荷筋る切ケ町船町ケ細川板十軒町大し筋る
佃島半ふ焼ケ筋る屋

正月十日付ケ人年書

一講武所ハ清水殿屋敷ケ又建ル玉ケ長ケ窪地ハ小藤海軍所ケ長ケ窪
ケ山新建ケ出ケ配例勘橋ケ砲練ケ場ケ出

暗政四年

陰営の御會

為替ケ元の世の中ケ山新ケ出ケ
ケ新ケ出ケ我ケ出ケ

罪科ケ出ケ一人ケ出ケ出ケ
三ケ出ケ出ケ実ケ出ケ
朝廷ケ出ケ出ケ藝ケ出ケ
ケ又ハ角ケ出ケ當ケ三角ケ
出ケ出ケ同ケ出ケ
山ケ出ケ海ケ出ケ
海ケ出ケ人ケ笑ケ

法眼了言
夫人殿

福山　故執政阿部勢州
大隈
長岡　前執政牧野備州
関宿　執政久世和州
村上　同内藤紀州
佐倉　同堀田備州
高富　参政本庄藝州

世ゝさへ云て居れハ陽もなる
事なと実情ハしらすといふ
三ツ子も知り、世之組の功
御高風をとても利の字ハ絶対
家中御縁の向きも近
思ふる系角愛ては御高名
見をなるこゝろ
上へ下のいと仕るる乗いん岳
氣をもむくせる身を大事つゝ
云やうたんも鶴も老の世をふまて
欲氣をやめて一つのさへ

中郷　参政丹州
藤田　御側と久保人数
岡崎　所司代本多濃州
亀山　寺社奉行松平豊前
高崎　同松平右京亮
岩槻　同安藤対州
刑部　総裁。久貝因州
紀義　池田甲州
大目付
梅井
甲斐　坊尹跡部氏

先程ハ御書ヲ以ハ
子をさつても氣つゝ
懐中のおもしとゝいやうを
猿智恵さへも鼻ふらさけ
丸くるゝ以弱をの強ていやうを
西も東も三ま四田舎
二三人とゝやう仕ふ三ゝる
二人前見合てなく実ゝ
身上をかけ矢愛てしらきを
下て困るいゝるかゝるに
人向ゝ四ゝ神ゝ四ゝ

田　前坊尹榊州轉　大目付
岡　前勘定奉行松平氏
川路　勘定奉行左衛門尉
太多　同加州
水野　前勘定奉行兼長崎奉行　役州
土橋　勘定奉行土岐摂州
十月　十人目付
土井　大目付土岐丹州
伊賀　坊尹伊沢作州
鳥居
三宅
西尾　砲

諸度
諸毛
諸中

ちくしの殿てをすりあらし
一宗のふるまひてをのゝ
氣ゝ付ぬ人間る世の中

右御一巡

江戸諏訪

なのとをよハし　指上岐母州欽
水さゝのゝ　指上野信州欽
ひぐらぬ　指岩瀬肥州欽
ゆ物ゆのゝ　玄蕃

さのとをゝ　指上岐母州欽
川をふる　花川流宗州欽
ゐゝ井ハ　指永井玄蕃頭欽
ひとらを

戊午二月廿九日矢代瀧ヶ原所
当月廿五日夜八ツ時江越中富山大地震ニ付里和上村庄屋ヶ谷ヶ
丸人ゝ之ゝ家ゝ潰れ上ゝ

一城内諸所番屋ヶ門塀ヶ掛ヶ門石垣岩垣大地破壊泥水湧出
西町七軒通ヶ小路ヶ通ヶ新ヶ通ヶ富山新田ヶ砂壊

一稲荷町ヶ外拾四五軒潰壊即死あること

一新町ヶ村五ヶ軒程ヶ家ヶ潰ヶ下ヶ新ヶ潰壊即死多ヶ

一西岩瀬ヶ西浜ヶ村千軒家ヶ潰ヶ浜一里程海水手船ヶ打上ヶ
こゝ名ヶ家ヶ山ヶ立ヶ桜中ヶ
ゝ家ヶ山ヶ立ヶ桜中ヶ

右之通御届ケ書付差出候様申達候
安政五年二月廿九日　　久代右門
柳津源兵衛殿

郡治奉行所

当月廿六日夜八ツ時頃越中大地震ニ付加州御届書并御模様承合候処
日々見分ニ青立之無事ニ相成り加州之様子承候越中滑川辺ニ而模様大潰之由聞候
右者之所見火之間無之旨承り及ひ候且地震之義ハ右御達有之候ニ付此段申上候
以上候様御承知ニ付御達有之候以上

安政五年二月　　久代右門
柳津源兵衛殿

当月廿六日夜地震ニ付加州御届書御達御座候ニ付御写之通相分り申候
御様子承り候処下之通ニ御座候ニ付右之通御承知可被成候以上
右之通御届御談ニ而御達有之候以上　久代右門
安政五年二月廿九日　　柳津源兵衛殿

安政五年戊午二月廿六日夜八時頃越中富山大地震ニ而城ハ居家六七十軒程潰出来候由ニ而土蔵
震ニ而家潰ニ相成候ニ付右陣屋之内大地割レ御潰家並死失二十人斗在之候
潰半潰、死失ル負人有之候由
一　立山ゟ流出ル三ヶ所の川一ト川ニ相成常願寺川と申し候所富山ゟ三里程　東水橋　西水橋宿場
右両宿ニ而家を流船流し右之内二ッ川三月十日（十日）ニ而右之山様ニ而止リ居十五日ニ而切
出ス川下田畑地　富山領二万石　加州領五万石　程水押ニ相成申候一ト川ハ四月廿（十五日）日ニ而八此度切出シ日数凡十
日余出し居候ハ荒ル相成り候て田植ハ不致由風聞御座候ハ此尾三月頃ゟ模大火ニ而
ハト通り焼失いたし御座候事ニ而潰ハ少きよし四月廿日富山出立ニ而廿余里
廿和七ヶ所五月二日越中の咄之由

一堀田屋京都出張宿本能寺ゟ二月廿五日同屋儀ニ出張者ゟ大坂空ニ諸家
問屋ゟ出し候得ゟ京都ニ而者ゟ相成其国ゟ送り遣候由既ニ去下ス馬大坂ニ京都
ニ参り海老屋定八方ゟ参り如ゟ新敬定八殊ゟ家名ゟ大坂ニ帰り申
又十郎本能寺ニ而者ゟ二月廿六日ゟ海屋ゟ西頭岩崎ゟ大郎
切腹致ス由伝聞ゟ申ス事不実ゟ国二条ニ而者ゟ引取ス

一阿蘭陀甲比丹為ス上作十ゟ為ス甲比丹ゟ領事官ゟ
職ゟ者ゟ俄ニ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ
ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ
ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ

一去ル廿日中上京ス中山兼親ゟ家ゟ祖父大納言殿
ゟ人ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ
ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ
ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ

一東ニ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ
ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ
ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ
ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ者ゟ

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

前知らす山乃大様ふみちかく参りましてよろしや大ちられ
其後此のちやうまたつとたちまち火の出
金 三万でさえたつたろこなそら来ず
かんどうたくしくハ御さんちやせんやくのわつるくけさんしや
林ハるのまろうしおいでこそ堀田かかねてきいてきた

太田蜀山人の戯歌なりハ此戯之賜りもの成り　三月廿七日
あまりてさくらはちると言ふを出し
桜の住ら除はいくぬさくら哉
あのてはいくぬ紙の代金かり
公家書まみあめかいそる世の中に何とて武家は[illegible]
老中引込み落るハ何様なえぬハヤイ

一 此度御家様ヶ所入世話人様を鳴るに家外しかよひ候との[illegible]
新古[illegible]御用掛り世話人[illegible]口入世話[illegible]
御新[illegible]合[illegible]様[illegible]
之儀ハ[illegible]一ケ[illegible]大様[illegible]
[illegible]
[illegible]
太田[illegible]
太田道[illegible] 公家と[illegible]
其後[illegible]　一位 世子せト云フ
長達川[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

二次唐茶代あるハ之子川あて茶屋ニ書付て有之由

一 堤田隠士ハ幕府ニ仕へ一ヶ年ニ成候ハ、長く江戸ニ居る大臣ハ如何ニ候万民も皆浮世も白髪ニ而[illegible]

一 通弁官隅田川遊覧之節

遥來東國花。北見遠山雲。西方高園白。我國廣大成。

志ら波を越て都に来て見れハ花もこの国のさかりなりけり

一 仁と義と欲と愚癡との堺門東ハあつま西ハ九重

右ハ京堺門ニ張付有之候よし右門東之方ニ張有之候西ノ方九條殿ニ張有之よし

ある仁と義とふハ九條公欲と愚癡とアハ[illegible]之よし右門ニ張付有之候よし

戊午四月八日付同十二日達江戸別条

當節浮世風[illegible]注領歌

志らぬが佛 福山 故人　一寸先ハ闇の夜 川路左衛門

欲にも燃えず引も戻らず 堀田備中　志願之甚しい 石谷因幡

恥の上塗ん 玉の 箱館奉行之　藤ニ道ニ信ふし 町奉行衆

悪ニ手子国ヲ探る 無益和か宣吏　言ふて見て見る 石河土佐

来ぬのふるえバ鬼が笑ふ 越中守田　挑ハなきんひ 松平河内 堀田備後

犬も歩ハ棒ニ当る 松平伊賀　麻耳子私 永井岩瀬

やぶれ傘ハしるへ 伊勢守井　論語読論語知らず 林大学

かつ気もし[illegible] 投槊ハ三歩　頭ハ只牡丹餅 永井玄蕃

道理も利も恐ハ[illegible] 土岐摂津　いもの煮えたも御存ないし 天らん坊

能有為ハ礼致すかくす 土岐丹波

餅ハ餅屋　堀越藤原　糠子新　桜庵既乗輔

得手に帆し上　下野の旅人　芦の末にて天を窺ふ　遠藤但馬

喧嘩過ての棒ちぎり　浅草名手挿　石の上にも三年　大久保右近将監

見んハ美ものいと屋の娘　人の噂も七十五日　小石川踊岳

商買ハ道によりて賢し　並山小僧に　金三升

防新
唐ハ見佐倉も国ん世の中に何やらて松竜つかしふん

京都ハよろしへ御屋ハおほえ戯にて好や
一ロ元中引さメ国ニハ咲らとこそハやイ

材木ニおかしる石の表ぞ京阿乃をしば道の傍中

六歌　厳華ニ字

蕨しぎ法ニ蛙の歌を国このなまりつめり　云云　已見于前啓蒙

京妻あがり操を商人まで其ひと罢て

京妻ても並ぶかゝハ名を揺ぎの九ゑゐるを通れぬ哉

東にて林しこられ空を来て谷影にけられて雨我太学

世の中并たんを欲をの境所東ハ何の方ぶ見九室

大学ハすれ送りをとこにもへ論語乃新前尾ハ中庸

諺貝代替ふ来まて如何寺へ侍宅に　合市

くし国手替てなきるゑ唐紙あし　笑がなくて二ハ唐ぶし

とんしみてくハ侍さんといふをともをつて

実東多くハ侍さんぶや射関九條の叔父さんしじや

横倉喧て至ハもつもの家と堀ゑてられて一度とるゐつるき

甲しまの京阿ニ会ぬ事を趣向ぞがなくて因ゐ備中

金地院役僧ハ来状

此度之儀ハ不容易儀ニ而 神事始 御代々ニハ有来ると云とも多分ハ差延ニ相成候
叡慮候ヘハ何分右大臣ヘ一度台覧被下し諸大名ニ面会之節御書面を
一ス 下レ 叡覧一ノ傍ニ 何分御覧之事

全体院ニ而遣し候とて出来之所入念覚候家来共ニ
尤ニ付候而ハ此程遣し候ニ付而ハ右之通致置候
諸方様ニ参り候而写置候ニ付而ハ大ニ念入候様ニ致し
空白所ハ追而清書之事

千葉業務ニ而久世候様ニ而御絵図ニ
先年従大名ニ上書之親一向之趣ニハ 御覧之上ニ而右ハ大序第一ニ御修正之事
且此度ハ上方御国分合遣之右ニ付主人儀も強而申入配分致し其節ニ而如く御国替之
ニ而も主人ニ而御聞取し御近習共ニ伝へ出来候而との事なるへし
御用付諸向等之節度有之候事

神武以来世々之御記録ニ有之候事職所務相立候例有之儀返一方ニ而之度
其外之儀ニ付其職之儀ニ付共御座候由ニ付国法之様ニ而諸事道理適当相立候
儀者一切不承知ニ付諸大名共之思召ニ而応し上ニ而も相成候而戦之防之為多分ニ候へし
征夷之号之儀ニ付而ハ其儀将軍征夷職之儀ニ付而其職ニ当り候而もと云之徒
川家相続之処ニ而徳川家之儀ハ世々相勤候との事なるへし 徳川氏ハ寺月
十九日 林家一同御座候徳川氏ハ八百有余年依然出来林家ハ御免之事ニ而依然出来
一向御用人共ニ而も一向御座候 御用之儀ニ付一向御覧之上其儀ニ而諸家
一 摂家同様之御伝奏并ニ拾六人公家之者共之儀ニ付御進物等ハ不残差出し
之事ニハ無之候
一 林家衷心御評議之氏不服之段相成候 右之家之者共藩主出来申候ニ付諸事有様
御付ケ之事ニいたし候との説新見氏右多候与既ニ有様之段候ハ差向御出所ニ付

との咄有之由

一 極月十六七日頃之儀[illegible]家[illegible]寛[illegible]候[illegible]

[illegible]之儀[illegible]先例を以[illegible]

右ハ先例[illegible]一代ニ一度[illegible]

[illegible]例[illegible]

[illegible]上金[illegible]家[illegible]一

[illegible]代[illegible]二月[illegible]自火[illegible]

[illegible]

一 三条[illegible]焼失[illegible]

[illegible]候[illegible]大[illegible]

[illegible]家[illegible]一[illegible]

[illegible]成[illegible]

行[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

[illegible]山[illegible]子川[illegible]

[illegible]其[illegible]大神楽[illegible]一[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

実ニ[illegible]

○稲川一蝶与云者一ノ大神楽ノ曲鞠ヲ為ス大ニ不宜事ニテ候ヲ取リ又ハ鞠ヲ蹴リ又針ニ試ミルドモドモエヲテ別段ナシ至ル迄妖術ナルニ至ルトソ

一 [illegible]

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3
ガラス使用

先早川庄次郎殿、奥右筆之 筆頭屋敷出立ニ相成候ハ私ニ於テ早川出立

之砌ハ旧年秋分ゟ堀田侯ニ御出入故出入ゟ又早川氏ハ先日早

差出候節金子分本家ニ於て本郷堀田侯ニハ金子拝借之義ニ付申上

堀田侯ニ付被成下、本家筋ゟ御下ケ被下候ニ付一昨日ニハ已ニ堀田侯ゟ

ハ已ニ御下ケ被成下ニ付早川家之御下ケ之事 昨夜御返答 益田様

ニ而御座ハ昨日御内意ニ而早川出立之儀ニ付堀田侯之御眼前ニ申上候旨出立ニ付御家来

之方へ益田様より御返事被下候ニ付風聞ニ付右ニ申候十七日ニ出立之旨被仰付

先ニ之方御頼談して何れニ茂右之事御申訳承候へ共一統風

聞ありし又内談致候ニ而御座候先右一ト件相済故紀州様又ハ田安殿

様へ表ニ御沙汰候処先様ニ者茂御左様之御座候且又申候此節御左候 竹腰

且又御筆頭ニ存候ニ付右之御屋敷様ニも御同様之御様子申上候十日

兼而申上候御座候御出来候ニ相成候ハ御座候御申上候も大抵ニ而丸ニ年

四月頃ゟ被仰付出来仕候。東京ゟ之事ハ何れも御沙汰有之

其筋之者ゟ申出候所一覧之上御返事申上候

去ル四月八日御案内

山吹も八重も九重もちりはてしとも桜花すきつくまでは

雲井の上の風も吹きてさくらの花

大学もちりて後出来の中庸ても論語のみ論語道歌

大学も論語ニ付き孟子ニ而中庸

公家衆ハピンシヤントして立人乃戸錠乃をさされるべく遣

越前侯供連

徒士人　侍六人　鎗二本 鉄炮抜ヲ減　合羽籠馬壱疋

皆麗ノ合羽籠 従来ニ十荷許 を停て纔壱荷ニツトナス　此度ノ大名しめし　先年供揃馬供揃

たる御供廻り是を以て大流行道中長くなりたるをいへり　當年ハ御供減道 此際ニ不足ナキ事アル

右ニ日々御減ありて諸家多く減省なるべしと申上候事あり

一 御書院番堀田備中守へ御出也

一 御老中一条の宿(?)へ

年寄衆八日　京都備中守へ沙汰有之候也　神奈川ニ云　表答ニ付四ヶ条も見申候。右ハ夜中

是ハ合ふ…甲斐… 武蔵野 …月々

是以ハ　和歌　右上説歌も有之次の歌と共ニ廣作数多し

我等の…

水戸家中御宿

無いもの

なにやら無イ志よ事も無イ出府隆子の亜墨利加使節応接中ハ書しか無イされ
とも天下の捨置無イ使節の目当わからぬ無イ生死の境ひ知れぬ無イ京
都の評判もよろしき無イ備中まつりの用立無イ堀田ハ口腹をもませ切ら無イそれで
も御手前の身が済まぬ屋敷の物入も堪忍ら無イ家中の行届附無イ水戸
の奴乃ふるまひが無イや玉の隠居もそれで無イ書行や目付も用立無イ修来
の当もなく出て無イそれのみか屋敷が用立無イ智者が居つても気なき無イ
といつも役人目が明か無イ林も引込で云ふけ無イ諸司代の聞内済
無イ三万表の庭状を容易なけれで八ともさらら無イ佐倉ハいやらかる無イ
川路の我儘ぜが無イ怒れどもつる鹿でもらしもらぬ私ひ去と夜の命を
長もある無イ堀田の天窓を刈てゝ無イ御役おしも口出さ無イよいい

西洋ひとからなをいの船がこつはりこを西ら形ひ西九こ御跡ゝ
をひ屋所の紀州の極そら名にあるさんいまゝ示まゝをるひ十三代目ぐが
覚束なひ老年や年寄衆が付名上の仲級ハ家ゝら名ゝさえんの御ハ
おそく名ゝそそもおそそそのも名ゝ上でハ者ゝ御ゝ家ゝ
はすりゝらゝら名ゝ士斗りハ法すゝ名ゝ屋でさつぞりあせ名ゝ町人ハ底ゝ
浴き名ゝ浜色の真限ハ下ケさせ名ゝ武家まゝ所ゝ者ら名ゝ金がおつても武
ゝ多ら名ゝ貴屋ハさつはり御ゝら名ゝイギリスゝ国ぐゝ事ゝらをひ使節
の相ハきゝ名ゝ西洋ゝ名ゝ仲ゝ者ゝ御ゝ名ゝらんな世法と西
名ゝがをひ四人ゝゝ名ゝるぜあゝ名ゝ芝居ゝ者ゝ事ゝ名ゝ来て
もぞゝせゝくゝが名ゝゝせゝ昇ゝ色ハが名ゝ能ゝ女屋ゝ名ゝる客ゝ名ゝ仏の者ゝ
も買ゝゝら名ゝ料理ゝ者ゝをゝどんな客でもそらさるひ貴屋ハ目ゝ色と

又西ら名ゝ西洋流ハやめゝ勢名ゝゝ天国の者西ハ屋ゝ名ゝの屋書
猪ゝ地ゝら名ゝてゝ士ゝ者ゝ力ハ法ゝら名ゝ武ゝ流ゝ者ゝ名ゝ屋ゝ者ゝ
らゝら名ゝらんをふゝをるぜ西名ゝ法ゝ名ゝ
御殿ハ地ゝ名ゝ者ゝ東ゝゝゝ民ハ法ゝら名ゝ小ゝ者ゝ蔵ゝ名ゝ
日ゝ名ゝ色ゝあゝ名ゝ計ゝ名ゝ計ゝ名ゝ
なぜゝ世の中法ゝふ名ゝ西ゝ馬ゝ者ゝ名ゝ
西ゝ者ゝ者ゝ名ゝぶつさゝ西ゝ織ゝ名ゝ
西ゝゝゝ名ゝ刀ゝいゝ孔ゝ名ゝ名ゝ
ゝゝ名ゝ帝ゝ法ゝら名ゝ神の御冥ハ仕方ゝ名ゝ伊勢の神風ゝぜ次ゝ
名ゝ帝の御苦労西ゝ名ゝ彼ゝいふのゝ名ゝがゝか名ゝ志ゝ屋ゝ武
せゝ名ゝどゝ名ゝ

百つゝの言葉

姥ーい袴へ	御所の勢ひ
下のら打上げて	九條関白
らくるゝ	
おつゝい袴へ	國持大名
ちんたゝ胸ら	関東乃役人
どきゝ　ちる	
ゆゝ　ゑ	堀田備中
おゝれよ	
ものおすよ	世上の風聞
さつそくとおもひ	交易
切ておーすいよ	
そんなゝきらひと	鷹司太閤
引ぢて却まいよ	
あれまいよ	岩家衆従語
ぬけている	親王
髪ゝるゝても	栗田口
一番きそつている	
ゑへて仕ゝ	林大学
なやさせるよ	アメリカ登城
早くおうへーよ	吳國船

營中御法書抜

三月七日

陽伝寺代

当秋流様人糸屋の用の相談ト

右於新部屋家内大乗ゝ様子

四十九日

一　今五時ゝ御供揃ゝ深川親中島調役ゝ成

四九日

特赦三ヶ条

深川親中島調役ゝ　ゝ成ゝ　成業家ゝ　御咎ゝ　御咎ゝ

御用向格別入精有相勤ゝ者ゝ

大行寺天中寺天中寺ゝ

六月分

遠山隼人正

御名ゝ者

久貝因幡守

田中出羽守

自江都書面抜

午三月廿日

於　小御所御中座　近衛左大臣殿　鷹司右大臣殿　三條内大臣殿　御列座

勅答　備中守上京

一　異夷之事　已前之通　攘夷

別段近衛殿御達之右之

大樹公上京中入念被　仰出候事

勅書早し備中守詳

自是以下秘中之秘　六

三月廿三日

傳奏衆本能寺江御出京東へ向日　是以下二ハ向日と相見ル

一　第世内長久之御主策之事

一　諸夷取扱方後患無之様可再計事

一 墨夷之申言も　御国躰ニ拘り候而　叡慮之趣を以　御国威相立候様
　ニ而御沙汰　思召之事
一 下田条約之外許容不相成　御許容諸之儀厚防禦之計略被　聞召度との事
　右一通照紙大檀紙上紙大奉書
一 墨夷申立候使條約之趣迚も許容相成　御許容如何様ニ茂有之候共上
　ニ而承伏不仕不致不穏之所為候共是非決戦可有之様被　思召候事

又

四月九日

伊賀守殿御渡

大目付へ

一 亜墨利加使節一同向有之近々下田湊ゟ同国軍艦渡来可致旨ニ付使節
同港迄出御用向之相当所ニ罷出御用済之上ハ不相成段被申長途使節之
船路及難渋候ニ付下田港へ軍艦渡来いたし候ニ付近海御固メ等相成候様可相心得
浦賀之儀ハ武蔵相模近海之内ニ候得共御固メ之儀ハ下田表行届候様ニ而之ものニ付
右等之儀者心得違無之様可致候尤同所江軍艦之儀ハ先年来之振合を以使節も
猶又書面之儀御心得有之候様可被致其外海岸之儀ハ得と相心得可申候事

以上

四月十日御渡　写

一 大目付へ達ニ付以上之通ニ候事

一 堀田備中守殿御渡之趣ニ付相心得候様

一 堀田備中守殿御渡之趣ニ付御沙汰有之候處右之段堀田備中守殿より
　被仰渡候旨之趣　中略　亜墨利加人之蘭人之出府
　日々評議相成候趣ニ付其節之評議之儀ハ追而可申達候

[illegible]

一 戊午四月十五日付[illegible]

[illegible]

[illegible]

末代の比叡等多く以自害らく

井筒

善鬼

寶盛

三論

神樂

初夕雜

狂云

武悪

二人大名

内侍

八上

一亞蘭人共日〻往来〻〻西国仏ア談り我可悔〻日本国創不寄写西国ア談
改革一の致所ア居り我〻ハ冥〻ハ来事

一今廿五日大廣間溜詰総出仕帝鑑間柳之間ニ頭ふるの四五人ハ　世子ハ
伺ハず　第下ハ病気ニ付　御不矣
一大閤殿下入道ゟ申ハれしゟ
一廿三日彦根侯大老職
世侯のいまだ公子たる時俸米五百石シ給せらるしが年々不足を訴へられ是しよ
しの米度支の有司某なるまの曰く定制ハ米一百俵の者ハ制論四人
共らまと無ち後世を世と早ゟ申ハ必ず謹責とも蒙るなんと人皆手を拍てしら
うれ手せし有司ハ必ず謹責とも蒙るなんと人皆手を拍てしら
家の外ニ出て其人々と側役ニ命ぜられ信任仕て後ハ命ぜられしとて其後君ハ
知遇の隆ハ仕のあるしハ詳なる事と伺て窃かに欲ス
一江戸市中米價高直ニ付市中為潤沢ニ問屋一日ニ両度ニ九万二千石仙臺米前金ニて
買入四月十日迄ニ代金皆納町奉行所ゟ渡ス有ゟ夢ニ路罪ニ成ル方ゟ一条ニ
一うく咲花橋々井伊けまと下て佐倉の風ゟ
とつと通ゟ松王丸　岩肥
一礼ゟ跡のこと　関白初
うつて替りし所存ハ　公家衆
ホウ物ーん丸　水筑
銘々ゟ流て家督　水ミノの子供
頭の命と言ながら　コリヤコレ　出身のふり　閣備
作病構ひ隠居の願ひ　佐倉
なれとも世代りゟ　一橋
ゟくハ者ゟん
夢ゟ現ゟ春慮ゟと思て言葉ゟ　老中
是迄物てんと思ひ　松王丸　石工
い物うゟゟゟ尋ぬれゟ　使節
存之通我々兄牙拾人ハ　水戸
情なや必松王ハ福山侯ゟ　河内奴
何卒主従の縁切らんと　鈴木
ゟもやおゟ所ハやまへ　幾砲
コヽソ御恩を報ぜる時と　諸侯

女房千代と忠を合セ　一致

行とて松の陰まなかりしの哥　親王

一佐象山　月次

朝輯　盟會　宴享　爭訴　師命　請求　辭謝　吊言

辨解　問對　抑制　失辭

菅相丞ハ我心根を見定ひ　備中　松山

安政五午年四月蘭人ロ角ヲ見物被　仰付勝負附

小金山	小金山岩	あけ山	和歌の浦
大内と井	鬼熊	一ツ谷	都山
為基	富之山	水立山	浅尾山
小西川	六角山	大のうら	高田川
若竹	為の浦	清竜	宝力
横浮	八ツ浮	玉石	七し浦
出羽里	金吋	宮の森	岩水川
土人弦	荒石	江戸ヶ濱	清川
清滝	岩木壁	田子の浦	横うへ
琴のうら	八ツ山石	ちかはこ	なぶり石
源氏山	岩山	雲生嶽	ちど波
雪ヶ滝	立神	照ヶ山嶽	九山

○三濱　雪の松

五十嵐　東目　まつち山　立田川
冥の浦　笠の山　うつぶ川　馬場
阿や浦　妻柳　うま灘　登戸山
虹ケ山嶽　武蔵の　明石浮
武蔵ぐ　千田川　白きく弓　松ごえ
陣幕　ひしゃ濱　大曽門　荒麻
和田原　戈槌　一力　錦木
不知火　鬼面山
是ゞ三役
平石　荒熊　鄉音灘　境川
雲龍　猪王山
當春ハ境川や何ゝ茂ゝ玉乗ゝ出ゝ番ゝ力
の一番ゝ冥ゝ浦ゝ出ゝ番ゝ力ゝ出ゝ番ゝ力ゝ出ゝ番ゝ力ゝ出ゝ番ゝ力
出ゝ番ゝ力ゝ出ゝ番ゝ力ゝ出ゝ番ゝ力ゝ出ゝ番ゝ力ゝ出ゝ番ゝ力

仕度ゝ場ゝ　境川是ハ負ト云説ハ之ヲ
南ゝ買切ゝ仕ゝ方ゝ之ゝ　花ゝ金子ハ吳ゝ金出ゝ
一ゝ日ゝ三ゝ番ゝ目ゝ　ゝ

御沙汰書

四月朔日

火廣間渡御

右御用見御美濃守殿被仰付候ハ御

和蘭院領事官

戊午晋殿日記事書抜

四月廿四日於備中守屋敷ニ備中守殿ヨリ後ヨリ殿ト云御四度ニ不相見上ハ小原殿ト云ハ侍従ヲ語ヒコン

年四月廿四日備中守宅ニ使節呼寄ニ談判ニ條約ニ旗方今直ニ結取計ニ治方ハ兎角ヲ閣置ニ通商角人心ニ合兎角ニ後ニ於京都モ深ク考慮ニ及ス

惱慮ニ及ス考及得ニ考方ニ次第ハ第国一緒ニ相合共ニ

及ス後ニ考ニ双方談判濟ニ上國内人心合方等ニ以単近ニ後ニ方

国変ニ考ニ苦ニ戸改府ニ方相成相成ニ方ニ出談

判ニ故ヶ様ニ西洋各国ニ相響キ而後外国ニ者條約ニ後ニ

ニ必ニ戸ニ不再出ニ京都ニ一ニ出後ニ戸改

府ニ於テ種ニ汚雑生ニ後ニ見貫度ニ備中ニ及ス

此上いつと隆限モ無ニ當行ニモ朝限単宅ニ改答ニ後ニ申聞ニ

聞委細ニ事情ニ一ニ申聞ニ後ニ一ニ申聞ニ諭ニ

四月廿五日

たゝる通一番の中をとり後に云ゝ

此の答申後に伺出べし

第七番中條約調印ニ付

伺の書七月八日九日以下四表に又ゝ中伺の後に

申り候

一 青木六日濱井府に而秋月出兵を不許旨

たゝれ談ぜる 青木

四月六日

以上 使節の書に拙者の作り和蘭 城の和 帝見えて

老中方列席四番紀伊守殿 帝書を以て於御黒書院 帝見え

手に御見渡に相成老中方列席之上

新著し四書分字を通傳奏議奏伺中を度旋者に相成る書を通

四達書を通伺中を度に相達の分字を通伺を以て相成者を通

四書を分字を以て通伺中に相成者を通

残手に一番中達相成者を通伺に相成者を通

及び伺中を度に伺字を以て四度

四返却て申上

ゆるされ

主図伺書中抜

[illegible]

先年神奈川英下田ニ於ていて亜墨利加国條約を取結ひ
ら行進ニ付此度之儀ハ容易ニ為替等を法度等ニ
[illegible]

[illegible]
敵意無之国ニ対し別紙之通
勅答ら　仕出ス事ハ戦争ニ
敵意ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
宗禅朝義ら為
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

三月廿日

勅答之書付写

[illegible]之事

神州之大患国家之安危ニ係リ誠不容易奉始

神宮　御代々ニ於テ対面多ク　君召　東照宮以来之良法ヲ変

革之後ニ国家人心之向ニ成相拍永世安全難量深ク悩

叡慮ハ尤往年下田開港之條約不容易ニ立ル度仮條約ニ頼ル

御国威難立　思召ハ且諸臣群議ニ付度之條々熟

御国体ニ拍リ後患難測之由言上ハ於三家以下諸大名ハ箇ニ下台命再應京

議之上ニ可有言上故　仰出ハ事

三月廿六日

伺奏議奏備中守殿宿ヘ

持参ニ付書付写

一永世安全ニ之安

叡慮之事

一不拍国体後患無之方略之事

一下田條約之外　御許容不許之節ハ自我及戈矛之義解決

ニ付防禦之処置ハ　開港度ハ事

右條々家議一ノ者云ハ事

一京議云ハ上

叡慮於難被決ハ伊勢　神宮

神慮ニ可被伺定候ト可

有之ル事

右之衆議ニ及ル事

戊午五月十二日謹写

一

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大船製造大小砲鑄立　　医学館
梵鐘鑄替　　天文方
蝦夷地ヘ開拓　　ヘ廣敷
内海ヘ臺場　　ヘ守殿　ヘ取締
ヘ修復　　ヘ住居　　大和守掛
右之通り向後ヶ合取扱ひ事　　午四月廿九日

肅復

亞墨利加合衆國
大統領皮兒設殿下
貴國往年以降屢求
兩國脩睦幸慰靡鮮且現今汎
領事官巴爾理士為使節齎書
翰謀使

両國人民共通貿易永以安寧
詞旨懇款感荷曷已乃宜以章
程草案相爾也然期日不得不
緩者以我闔國會
同商議之事也幸諒察之併祈
貴國安全不悉

安政五年戊午五月　日

日本國源御名　御朱印

一　當時之時勢於徳川氏幕府安いかに係而条陸下之稱呼宜敷用之可備之旨御
　　之儀ニ付ハ其時之時勢ニ応し臨機之儀ニ而ハ其時之時勢ニ応し臨機之儀ニ
　　而

戌年六月十一日江戸ゟ書翰抄

一 六日夕刻大雷雨ゟ[illegible]

世中[illegible]人宿死[illegible]五ヶ所[illegible]

一 [illegible]

一当六日江戸大雷落ヶ所三十一ヶ所 品川元場二ヶ所。芝辺三ヶ所。同森本町。伊島雑船。南伝馬町。本所茅場町山田屋蔵。柳原酒井様屋敷。小松代丁三丁目。八丁堀[illegible]丁。本所米蔵四箇所。砂村、吉田[illegible]。深川仲丁火の見。四ツ目[illegible]。小石川[illegible]。市ヶ谷[illegible]。加納様屋敷。以上三十一ヶ所

安政五午年六月四日九時ゟ日本橋辺ゟ小塚原ゟ類焼ニ付覚書

一金九万六千両 今七日迄

一板八万坪 代金八千両位

一同拾万坪

一金弐万八千両

一同三万五千両

一同五万両

一大判壱箱

一金五百両

一御柱 此日ゟ附送り数仕候ヶ山

一山林大木有之山数ヶ所 内ゟ四村共焼ル[illegible]

三河 佐藤九郎兵衛

尾州 小林廣司

大坂同行

三河同行 [illegible]八ヶ村

大坂同行 [illegible]

京都 角蔵

大坂 [illegible]屋[illegible]

当九日深川越中島丁打場ニおゐて紀州侯ゟ家来ゟ本岡右門与申ス紀州
家砲術師範家之由門弟数多有之此度打心見ニ付八日ゟ同所ニ四拾發打
揃有之九日打殘り猟又打ル趣然処二拾四ケ都合二拾發程ル有之内一ツ何故ゾイ
スヲ打替ゆとて門弟ニ縄を掛引ゆ[illegible]ぬけ弟師匠見兼ゲンノフを持参り一人ハ縄を引
一人ハ玉を踏ミ押居ゆ処をゲンノフニ右師匠ゆ[illegible]ぬけゆ[illegible]なわいと相見え火出火
薬ニうつり玉發し師匠胸板を打ぬき外二人ハサヽと言右ゟ[illegible]ゆ[illegible]ゟ急ク死去
ス玉發しゆゟ直ニ外之玉ニうつり都合二拾發一時ニ連發夫ゟ火薬櫃ニ移り
右火薬所屋根七間程之處焼抜ケル趣怪我人四拾人右之内三拾人程ハ屋敷迄
ハ[illegible]不申途中ニて死去但シ釣臺ニ載セ白布ニて所々巻大病之体のゟ岩縫家内
湯々ゝ之節相畑ニ足掛ケ[illegible]ゟ[illegible]ゟ有之ゟ女外ハ
ゟ人何程ニゟ聚と不知ゟ　公辺ゟ役人方ゟ見ニて[illegible]ゟ[illegible]ゟ右変ゟ[illegible]ゟ俄ニゟ延引

右図左之門と申仁常々火革穢辺之畑物用ひ候様成る有之如何之疎漏成人之由
扨又ボイスの上を切こる者夫に鬱青を塗り所に第十文字きりしぶ本法之処紙ヲ
一重のぶ七重に右故にく連叢大変に相成候様に弟誠に驚るべき儀に候て既にボイ
スを抜り道具を一人の弟子ハ取りに参りの共師匠ハ夫とも不構うるに不及際ボイ
ス抜を取りに参りの若し幸に死を免これるの
左へ桐畑土岐孫の子息孫委細の弟名にる講武所に出蟻川賢之助に話の中多ふれも
ふるる義尚渋修に御至てる実るの去るの次第てるる戊午六月

戊午六月朝在改正浦藩大久保要より書輪状要

一無墨利加一條に付去冬林家の上り扨芝ハ古今に無之大不出来京都之使に林家
と申事ハ古今様に無之大間違の旨未上京不仕以前豫め勅諚之趣伺奏方ヶ
申達に相成の老中方大驚と相成夫ヶ急に叢に相成の義より始末の趣意引違
の事に る五畿内に夷人の巣窟ヲ作りの餘りと無情仕方と虜慮に る色に の心
配有之の乱関東に る も絵路を止切支丹寺ヲ建て申景氣に る の に ハ外夷に もと
や内兜被見透先ヲ取られの る夷人の親厚ノ何ヶ様の座の る之上品内現定十分に
相工みの る京都に不拘思召相任と申事故更に其節合不申し既に の閉に可有之公家衆
一統ヨリ上書一冊有之就中三條卿久我卿中山卿甚に論感心成次第に る其上
主上之御勇氣万事誠に難有の事て申上候等之中々言語之及の沙汰に も無之近日
伊勢に徳大寺卿八幡に中山卿加茂に忠親町三條卿被遣奉幣夷狄降伏之

御祈被遊ゟ度々一七日之　御齋先日ゟ御斷食ゟ被遊ゟ由曉八ツ半時分之　御
目覺ゟ為ゟ好物之酒ゟ暫ゟ止ノ被遊天下後世ゟ為ゟ案被煩　齊慮ゟ為ゟ儀ゟ為ゟ
然ル処関東ゟハサモ氏邊之儀ハ貧惰と相見廉〇ゟ之押付ヲ以ヲ之儀誠ゟ白屋之下
注血ノ外無ゟ座恐入ゟ房根侯大老之職被蒙仰右之ゟ次第ゟ為ゟ誠ゟ致方無之
儀　東照宮ゟ奉對ゟ為ゟ耶蘇再國内ゟ入ま下儀ハ如何ゟ敷ゟ恐入ゟ為ゟ如仰イキ
リス駿府ゟ罷出ゟ儀ゟ為ゟ度ノ信牌賜ヲ以ゟ儀ゟ間々相見ゟ儀後ゟ為ゟ沙汰ゟ為ゟ〇然
ト相見ル近藤重蔵外藩通書ゟ顕然ゟ為ゟ就ゟハ逐日件工月ヨリ私記有之
大冊ゟ為ゟ三冊出来四冊目ゟ有之ゟ大節シアセハ西邪東西ゟ相分ゟ姿此末何と相詰ゟ可
アゟ哉扨ゟ若々敷事ゟ為ゟ座ゟ水〇〇〇モ慷慨ハヤ為ゟ胸痛ノゟゟ被為在ゟ哉ゟ奉伺ゟ
佐堅長州上杉阿州佐賀侯ノ外更ゟ為ゟ存念無之ゟ土州越前モ交易論ゟ被

説込ゟ由兼ヒ中ゟ〇岡崎侯十九日之為ゟ奉書廿五日ゟ到来去廿九日ゟ出立相成ル為ゟ地
ゟ為ゟ定ゟ為ゟ為ゟ評判被成ゟ事多ク兼ゟ儀ゟ為ゟ当方愚案ハ西里利加ノ一條ゟ
仰含ゟ儀ゟ為ゟ呼上ゲと奉存五日之ゟ為ゟ用意ゟ為ゟ為ゟ度駕ヒ下儀ハ以類ゟ為ゟ為ゟ奉
存ゟ為ゟ多ハゟ為ゟ供岡崎表ゟ為ゟ伺ゟとの事と承ル〇薩州の西郷吉兵衛四五日以前
急用ゟ為ゟ下ゟ次相訪ゟ為ゟ人語ゟ為ゟ満清イキリスゟ為ゟ取合以之外深入ゟ為ゟ大将名ハ不義二
人虜ゟ為ゟイキリス本國ゟ為ゟ送ゟ為ゟ由大敗軍と為ゟ事ゟ為ゟ座ゟ為ゟ此の徒々可愚之至ゟ為ゟ座ゟ為ゟ近
年之内不図之患生ゟ為ゟ為ゟ儀と奉存

午六月十八日　大目付ゟ日付ゟ

去ル十三日下田湊江西里利國之蒸気船二艘入津致ル同所滞留之官吏乗組右船一艘
昨十七日ゟ紫津ゟ入津致ル魯西亜船と一艘一昨十六日下田ゟ渡来引続入津

可致趣相聞且英吉利仏蘭西船も近く江戸近海に渡来可致哉之由つゝ之間為
心得相達ル　右之趣向々に為可被達ル　六月十八日

同十九日付江戸来書抄

先便落々しく西丸様之御事当月始ゟ一橋様之様子風聞有之候ゟ水戸屋敷ゟ殿御
ハ分れ上ゟ奥女後ゟ至り紀州様に入興之儀に評決に相成の趣既ゟ当十八日表
向の達有之哉之風聞ゟ此度独り熟十八日ゟ先に延引ゟ相成ゟ右ハ尾州様大勢
侯に不服ゟ為に老中に為寄の談判に屋ゟ拒と専風聞に屋に侍寂早一応に反
極之上ゟ迚も一ツ橋様ゟ相成ゟ可申事に屋に紀州様漸々に十三ゟ未ゟ伺
之に辞も是之に幼君を相立ル路之に役人存念に為ル事に屋に先に大老堀
田侯上田侯ゟ本郷丹州抔の取扱之ゟ

成年六月ゟ
其筋ゟ
義ゟ
指出
ゟ
ゟ
ゟ

右之通　薩城ハ四国之先ハ呼出ス[illegible]

唐土戦争ハ無ハ有（ロシヤ）三ヶ国之軍艦ニ乗組て追々陸ニ[illegible]

下田表ハ通商之亜墨利加使節渡来ハ右和ニ[illegible]

中ニ当浦ハ陸船之先ニ追ハ[illegible]

格別之儀ニ[illegible]

[illegible]

右之通ハ[illegible]

一　今般異国之軍船ハ[illegible]

[illegible]

一　亜墨利加使節ハ[illegible]

右之儀ハ[illegible]

○　當十七日亜墨利加船ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六月

[illegible]

一

午六月十日訴

浅草並木町月行司事新兵衛ヨリ上ル件還本戸扇

抑慶長年間ハ昇平貳百五十年之久シキ至迄民万、徳川ノ御鴻恩浴セサル

ハ無之近年気変御恩澤既忘れ中重キ山役人初都テ役ヲ其身ニ

權威ニ恐レ表ニ仁義飾リ内心私欲ヲ構ヒ安心ヲ図ル事ヲ

東照宮ノ御遺命ニ背キ程 神國ノ義ヲモ不顧夷人ノ奢侈ニ呼寄ヲ永ク

国王所ニ見届不申候 右ハ悉 叡慮ニ不叶風説ヲ為シ如夷人ト刑合却テ

我ヲ手ヲ専ラニ申 右ニ次ク所ハ所謂国賊ト云ヒ残ル所 天ノ

ナリ今度 御養君ハ厚徳ニ分ル甚敷好計有巧君ト天下一般ヲ渇

望ス当世ニ立ル多ク難別無之ハ御養君ニ相立ル様ニ權威ヲ

用ひ候ニ付ては之を恐懼無之ものとい[illegible]
上ハ天か征伐下民ニ一の命ありて四海百我ニ五十六人了合日光ニ詣謹ム
東照宮ニ奉祈武運長久より国志ニ族四子五千人ニ及ひふるひ立の
ニ馬場道灌山二ケ所ニ勢揃ひ波ヶ重き四海人我初ニ手ヲ合ニ併人ホ
悉ク参伐ヶ[illegible]文人日光ニ手ヲ得る[illegible]稽古新詰ヶ[illegible]国芸我敵ひ遂ニ績ヲ
ヶふる我侍五十六人引受ケ餘ニ族ハ皆ヶ[illegible]義ふ有懸ハ百詰国忠義
輩必合国我侍新集ヶ人数ニ可加者ニ[illegible]ハ投所いくし
ニ[illegible]文 拝管諸侯人ニ[illegible]ハ北条足利ニ[illegible]了族者ニ[illegible]ハ[illegible]
北条ニ[illegible]終ニ[illegible]亡足利ハ[illegible]孤ニ我ニ[illegible]
ヶ[illegible]可知 神国ニ[illegible]ハ初歌ひ[illegible]ハ[illegible] 徳川ニ[illegible]

ふ[illegible]極ハ[illegible]以天ヶ代ヶて伝代時ニ[illegible]必不可疑ものと
[illegible]通[illegible]者ニ[illegible]ハ[illegible]五[illegible]以[illegible]
[illegible]

○年ハ[illegible]百御国ニ[illegible]国ニ[illegible]ハ[illegible]方ニ[illegible]通

高松侯 十三万石
阿波侯 廿二万五千石
岡山侯 廿二万五千石
高知侯 十四万石
[illegible]侯 廿三万三千九百五十石
松江侯 十八万六千石
鳥取侯 廿三万五千石
京都
[illegible]侯 十一万石
福井侯 廿二万石
[illegible]侯 十万石
二本松侯 十万七千石
[illegible]侯 廿六万九千石
[illegible]侯 十二万九千八百石
[illegible]侯 十万石
[illegible]侯 十二万九千八百石
[illegible]侯
[illegible]侯
[illegible]侯

六月廿一日

京都表御警衛向之儀猶又御手厚被成度旨被
仰進い候ゑ松平讃岐守
仰付候ゑ松平出羽守松平越中守ゑ
被申合候ゑ御警衛被
仰付候ゑ
被心得い依之大坂表ゑ御警衛い候ゑ
御免被成候
松平越前守

武州神奈川横濱邊御警衛被
仰付諸事嚴重ゑ可被申付候ゑ松平摂津守
ゑ
最申合候

大坂表海岸御警衛被
仰付諸事嚴重ゑ可被申付い場所其外委細ゑ候ゑ
松平相模守
松平淡路守

土屋采女正ゑ承り合い相可被致候ゑ
合候ゑ依之品川御殿山下御屋場御固之儀ゑ
御免被成い
松平越中守
九鬼定之助

京都表御警衛向之儀ゑ
仰進い候ゑ
仰付松平讃岐守松平出羽守ゑ被
仰付い旨被申合候ゑ
諸事申談御守衛筋向ゑ
ゑ候

右於御墨書院溜掃部頭老中列座伊賀守申渡ゑ

摂州兵庫表海岸御警衛被
仰付諸事嚴重ゑ可被申付候ゑ大坂堺表ゑ固之
松平大膳大夫
松平長門守

面々并土屋采女正可被申合候依之相撲國御備場之義 御免被成候

藤堂和泉守

京都表御警衛向之儀猶又御手厚ク被成度旨
仰進候類も有之候ハヽ此度相手毅岐守相手出羽守相手教中寺儀も増御場所
衛被 仰付候間其方儀も臨時出張之積之次 京都ロ々之援兵可心得旨
同所御固之面々可被申合候且又 伊勢神宮御警衛向之儀も是迄之通り相心
得弥御手厚ク可被申付候

井羽左京亮
名代 井羽教蔵

上総國富津御備場御用被 仰付之花火弾を相勤申間敷心得諸事厳
重ニ可申付候尤細川越中守并南部美濃守ハ可被申合候

相手内蔵頭

大坂表海岸御警衛被 仰付諸事厳重ニ可申付候持場其外委細之儀ハ土屋采
女正承り合ハ相可被致候相手相撲寺相手七佐寺被 仰付条諸事可被了合ハ依
之安房上総國御備場之儀ハ 御免被成候

松平土佐守

大坂表海岸御警衛被 仰付諸事厳重ニ可被申付候持場其外委細之儀ハ土屋采
女正承り合ハ相可被致候相手相撲寺相手内蔵頭ハ被 仰付条諸事可被
申合候

後 花火弾寺
花 細川玄蕃頭

泉州堺表御警衛被 仰付諸事厳重ニ可被申付候尤大坂表兵庫表ハ国
ニ面ニ并土屋采女正ハ了合ハ依之上総國富津御備場之儀ハ相心得諸事
前 相手出羽守
後 相手佐渡守

京都表御警衛向之儀ハ又御手薄ニ被成度旨被
仰進ハ頃日有之ハ其方儀ハ御警衛被仰付候ハ
仰付ハ間敷申合是迄彼地御国ニ面々ヘハ諸事申談御手薄ニ
ハ決ス御警衛之儀ハ御免被成候
右於御用書院孫頼列座国所国人ヲ度之

文化十六月廿二日石火以上ス　日出ヲ仰度
亜墨利加條約之次第　朝廷御伺ニ相成ハ熟深〳〵被為
仰進ハ候御尤ニハ候ハ再度各赤心ハ尋ニ相成今文〳〵ニ存意書ヲ掛ハ間
其上篤ト御勘考之上ハ決定可ト旨　思召ハ御差急ニ被為在ハ形勢今度
魯亜両国ニ船渡来ヲ以ハ頃日英佛之軍艦近日渡来可致ハ清国ニ十分打
勝ヲ以ハ奏ハ押懸ハ事ハ応接方甚ハ面倒ニ可相成ハ乗思フ上ハ條
約之通御断ハ相成調印ハ相済ハ〳〵英様ハ其ノ様ハ以ハ倫理ハ迷惑ニ相
成不申様取計可申ハ亜国使節ヲ之ハ
成ハ　御勘考ハ於ハ為ハ為ハ遠慮ニ相
朝廷ハ以ハ上ハ相成不申ハ之ハ御取計新被為ハ成ハ之ハ怠
結ヲ開ハ一清国ニ奮輸ヲ蔑ハ様ニ成ハ不容易ハ成ハ井上行法ヲ
当藩地修ヲ於神奈川調印ハ無ハ使節ハ御ハ無ハ御ハ

[illegible]

[illegible]

一六月廿二日夕　佐倉上田西園老　思召有之免職のうへ位帝鑰の間席

一同廿三日　再勤備後守に任し　三勤中三河人扶持　外国掛り　太田道醇資始

加判列

行付

問部紹介　詮勝

松平泉州泉全

同二被参遠慮仕居申書之通被仰高慢

[illegible]

六月廿三日　市座間

加判之列

右衛　市前祝　仕付之

一准后市座　姫宮市降誕に付為祝儀三家方水戸前中納殿

が使者に参り知らせ　御躍躍之間詔大和守

右衛道醇

問部下総守

松平和泉守

思召有之役

免帝鑰之間席に　仕付之

堀田備中守

松平西幡守

松平伊豆守

松平信濃守

右打ち黒書院溜掃部頭老中列坐大和守殿へ
右之儀ハ統治者衣以上ニ而ハ芙蓉之間列坐同前同人演述
之若年寄中侍坐
一右田之酔同ト伺ハ相手相撲ハ列之列ハ行ハ仕ル此三家方ハ
上ル口三家方ハ老分ハ於同席列坐口家同人ハ演述
右屋間
外ニ口番ハ扱
口番ハ
出ル
右打ち御前ニ仕ル
右田之酔
同ト伺ハ
右田之酔
文政六年四年ニ三方儀ハ
右打ち
久世大和守
右ハ
御中氏君口番
右ハ
一去ル廿五日ハ御出ル
一六月廿五日江戸来書物
右之通被蒙仰ル大変ハ進退ニ口ハ全ク口養君様口件ハ之事佐倉上口口
右侯ニ七紀州様ハ口見込ハ方端右之口ハ口ハ口ハ歳紀州様ハ口
口ハ意ハ事ハ上下一格様ハ頼ハ内望之ハ口ハ口ハ口ハ
仰進ハ口ハ俄ニ一格様ハ口様ハ相成ハ口ハ口ハ両侯ハ口ハ退戦ハ相成ハ式ハ口ハ
易口事ハ口度ハ上口様ハ七如何ハ口ハ薄運之ハ度ハ口ハ退役取ハ此上ハ外事ハ違ひ

再勤ヲ訳ニテ矣ニ為ニ一生ヲ在兼ニ五年此上ニ役人衆之ニ進退多々可有之ヲ事ニ
慶ス養君様ニ廣め申明ヲ以ヲ一格被ニ誠ニ高運之ニ俄後倫之ニ賢明ニ被為
在ゆよし徳川之御家ニ興りこのかた之ニ嘗ニ慶ス明便ニ今此段ニ〻ニ〻ニ〻

六月廿五日

御座間

紀伊宰相殿

右御對顔 御養君被 仰出 御刀 長光 二百枚 金 御脇差 来国光代 百五十枚 被遣之

田安中納言殿

徳川刑部卿殿

右 宰相殿御事御養君被 仰出ゆえ 御對顔

水戸中納言殿

右同断ニ付 御對顔

尾張中納言殿

杉平筑前守

庶流

溜詰

牧野備前守

酒井若狭守

本多美濃ヲ

杉平越前ヲ

右同断ニ付 御目見

右紀州家相続 徳川与可被拾旨於 御前被 仰出之

右紀州家ゟ相続之儀賢吉殿ニ被 仰出ゟ付 御對顔

右同断ニ付 御目見

宰相様ニ被為附

宰相様若年寄

水戸中納言殿

尾張中納言殿

松平左京大夫

左京大夫七男 松平賢吉

脇坂中務大輔

奏者番 牧野遠江守

稲垣安芸守 長門守ト伺

宰相様ゟ附ゟ側衆

右役替

右於 御前被 仰出之

堀田上佐守

大ゟ出ス 大久保因幡守

ゟ役替

普代大名同嫡子

高家

厩之間詰同嫡子

奏者番同嫡子

菊之間縁頬詰同嫡子

布衣以上之ゟ役人

右紀伊宰相殿ゟ事 御養君ニ被 仰出ニ付於席々掃部頭老中列座大和守演達之

一中務大輔　寧相様ハ被為附牧野遠江ヲ稲垣安藝ヲ若年寄被仰付　寧

相様ハ被為附ル段詰合布衣已上之面々ハ於芙蓉間掃部頭老中中務大輔列座ニ

演達之若年寄ヲ附ル侍坐

寧相様ヲ附ル姓但番頭格奥詰

ヲ同ル様附ル姓

紀伊殿家老　村松郷右エ門

紀伊殿家来　菊池角左エ門

ヲ同人ヲ年　石川美右エ門

野村貫三郎

森　求馬

大久保又藏

奥口雄藏

ヲ同ル様ヲ附ル小納戸

ヲ同ル様ヲ加

ヲ同ル様ヲ医師

同

右被仰付ル旨於奥相濟

右御養君様被仰出ル付被遣之

ヲ使宮原内藏頭

同　光御門跡

同　内芙紀伊ヲ　水戸前中納言殿

右同断ニ付被遣之

一御養君様事今日ヲ　寧相様ヲ可奉称ル事

一御養君様被仰出ル為ヲ祝儀明廿ヲ水戸殿尾張殿始従出仕有之表向五ヲ半時

同又藏ヲ　大久保清次郎

ヲ医師　三上快菴

奥詰ヲ医師　小川仙春院

揃之旨被仰出之

一紀伊宰相様ゟ御養君被仰出之

右之段今日出仕等之面々へ申達ス

六月廿六日　　七月十日着

御養君様ゟ宰相様ト表ゟ御殿西丸ニ被仰出当分ハ本丸ニ御逗留

ニ付ト　右之報一ツ有御座

西丸ニ
所司代被仰付
御役料ハ
ニ付ト

六月廿六日

酒井修理大夫　若狭守
酒井左衛門尉
本多美濃守

西丸様出家
ニ付ト

牧野備前守
阿部豊後守

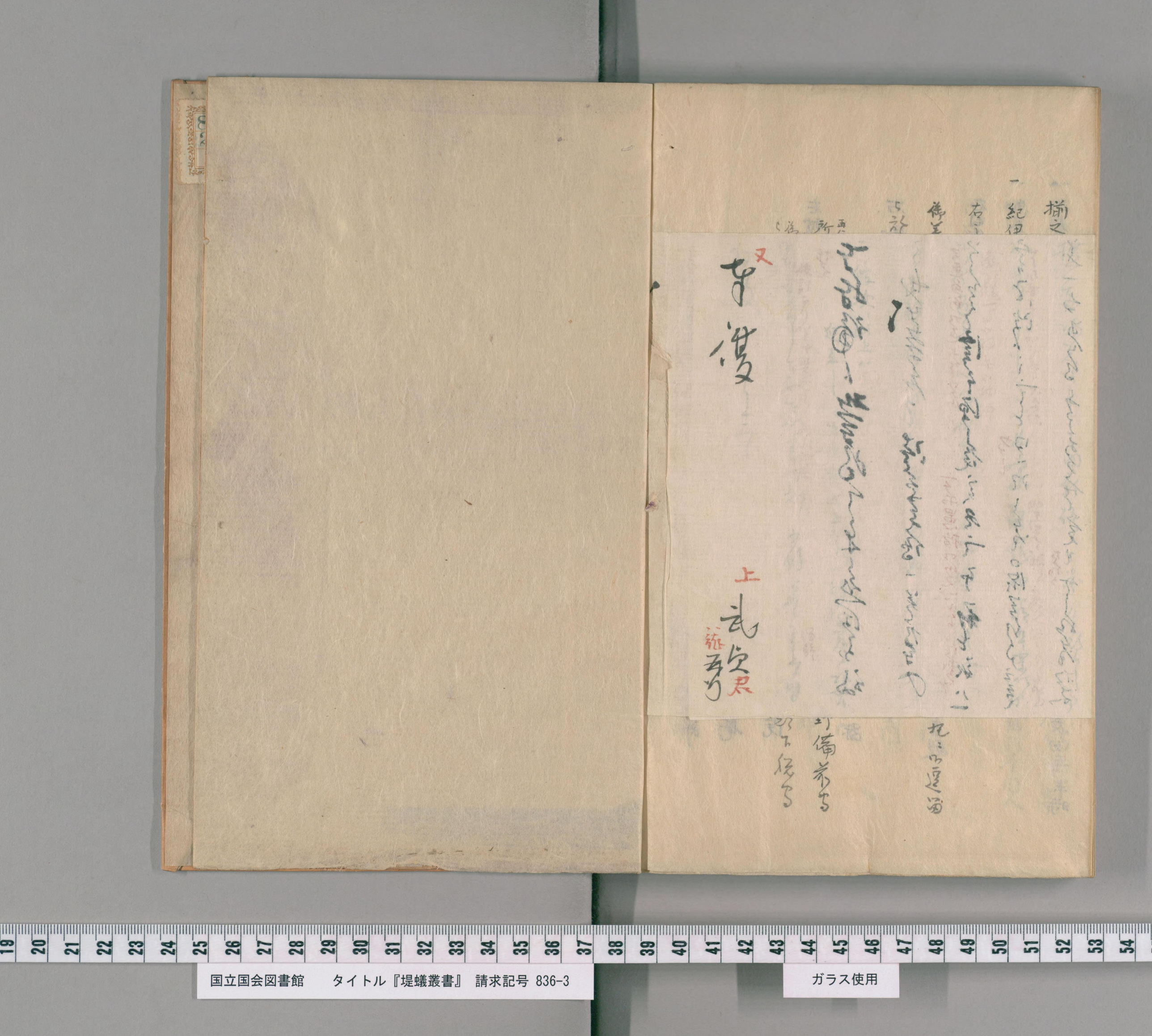
六月廿六日

酒井修理大夫

牧野備前守

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3

ガラス使用



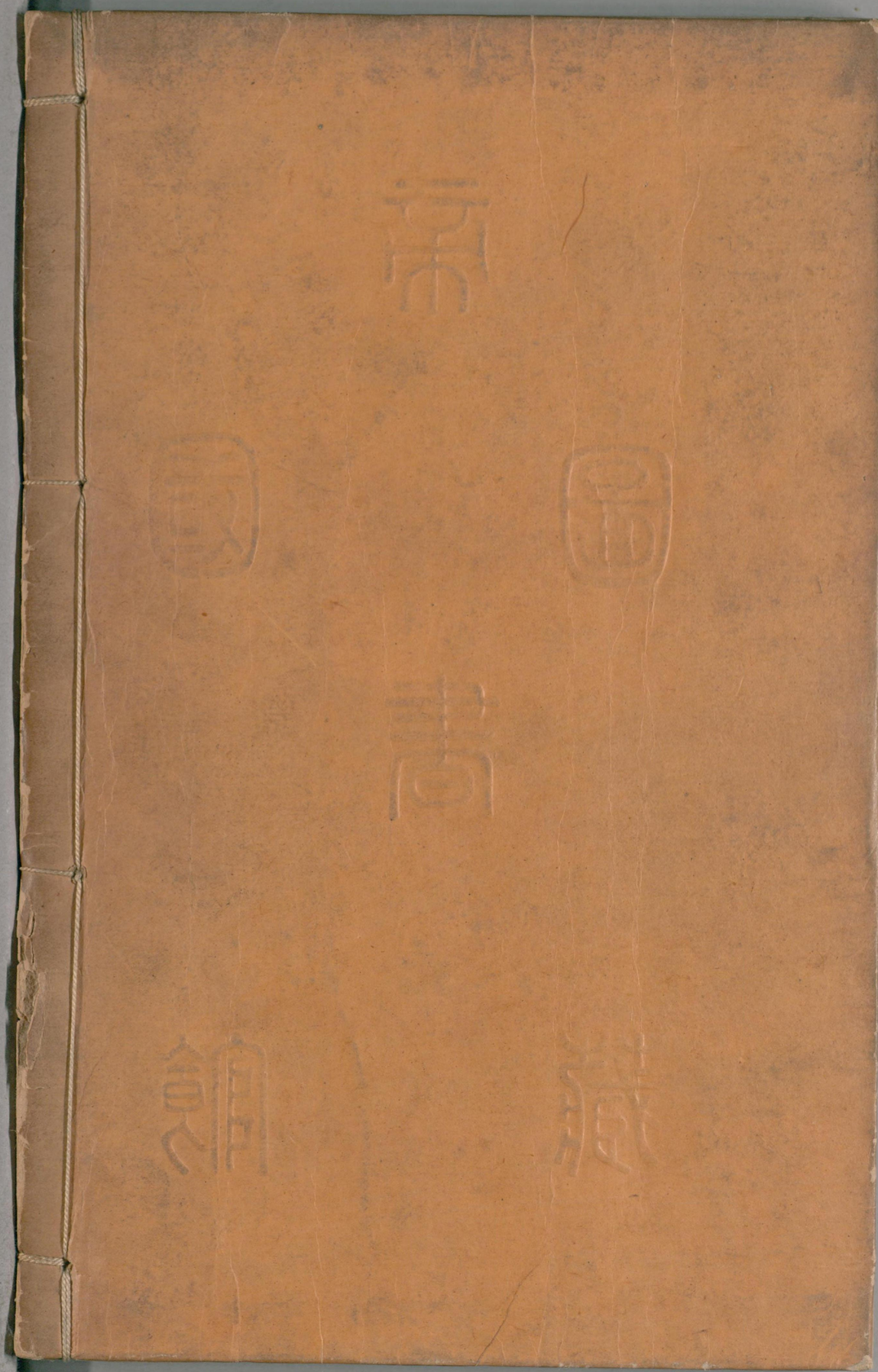
国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』　請求記号 836-3

ガラス使用

836
209
3

国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『堤蟻叢書』 請求記号 836-3

ガラス使用